

聴覚障がいを補う チャットの活用が学生の参加を 促し授業を活性化



中條 美和

高等研究所助教

聴覚障がいのある教員が教壇に立つ場合、手話通訳者やテキスト通訳者を伴って教える方法が一般的だ。しかし、現実には大学側がそれだけのコストをかけられないことが多く、こうした教員が授業を持つ機会を得ることは簡単ではない。今回の事例は、既存のICT技術を活用することで、教員一人の力で授業を運営することが可能になったというものである。

教場で対面授業と並行して 質疑応答をチャットで行う

聴覚障がいを持つ中條助教が2014年度に担当したのは、「Study of Politics 01 American Public Opinion」という授業だ。基本は通常の授業と同様に口頭による講義が中心となる。発音の不明瞭さを補うために、話の骨子をまとめたスライドを多用するようしている。この授業は履修者につき1台のPCがある端末室で行われているが、スライドは教室前方の大きなスクリーンにも投影し、学生にはそちらを注目してもらうことで顔を上げて話を聞くように配慮している。スライドは授業の終了後にCourse N@viにアップロードしておくことで、欠席した学生はもちろん、参加した学生も後から復習用に確認することができるようになっている。

この授業の大きな特徴として、授業中の質疑応答をCourse N@viのチャット機能で行うという点が挙げられる。学生は、授業のはじめに各自で使用するPCからCourse N@viにログインし、チャットルームに入室しておく。その状態で授業を聞きながら、質問や意見があればチャットから文章を入力する。教員もそれに対してチャットで応えるという形で授業が進行していく。

チャットに書き込まれた内容はすべての学生にリアルタイムで見えるため、ある学生の質問に対して他の学生からコメントや答えが書き込まれることもある。

活発な質問を促すために、教員側も淡々としゃべるのではなく、語りかけるような口調であったり、冗談を交えたりするなど、リラックスして積極的に参加できる雰囲気づくりに留意しているという。その結果、チャットを通して気軽な会話が飛び交うこともあるなど、授業の活性化にチャットが大いに役立っているという。

履歴が残る文字でのやりとりは トラブル防止にも有効

この授業はすべて英語を使って行われている。中條助教が以前アメリカのテキサスで同じ内容の授業を持っていたという事情によるものだ。その影響もあり、2014年度にこの授業を履修した学生は全部で7人で、過半数を留学生が占めていた。日本人学生を含め

て全員が母国語ではない言語で学習するという状況も、文字でのやりとりという手法が有効に働いた一因と言えるかもしれない。「口頭では質問をためらってしまうような学生も、チャットなら気軽に落ち着いて参加できているようです」。

学生とは授業以外の時間帯にメールでやりとりすることもあるが、その際もすべて英語を使用している。「日本語でメールを書いてくる日本人学生もいましたが、言葉のニュアンスの違いが出来てしまうと不公平なので、すべて英語で返信しました」。

この授業では、授業時間中に予告なしで小テストを行うこともある。これもCourse N@viの小テスト機能を利用している。そのほか、レポートなどの提出物やそれに対するコメントもすべてCourse N@vi上から行っている。Course N@viのレポート機能では、あらかじめ設定しておいた締め切り時間を過ぎると、遅れたことが一目瞭然で分かるように表示される。あるいは、そもそも受付を拒否するようにしておくこともできる。「私の場合は、遅れても提出はしてもらいたいと考えているので、締め切りを過ぎても受付は可能な状態にしてあります」。

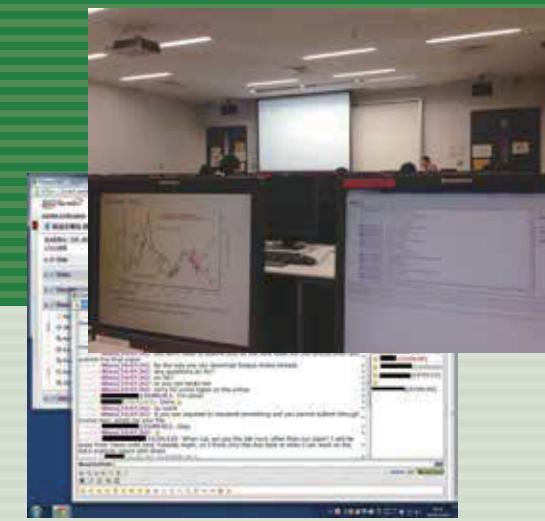
授業で使ったスライドやチャット内容、そして小テストやレポート、それに対するコメントなどをすべてCourse N@viを使うことによって、授業に関するあらゆる履歴がCourse N@viに残っていることになる。「この授業では、印刷物は一切使っていません。授業で扱ったことがすべてCourse N@viに集約されているというのは、学生にとっても管理がしやすいのではないでしょうか」。

また、口頭でのやりとりを一切行わず、文字のやりとりとすることによって、すべてのやりとりが記録に残るという点もメリットがあるという。「おかげで、言った言わないのトラブルを避けることができるので、非常に合理的だと感じています」。

米国の大学でも 同様の手法で授業を実施

中條助教は、テキサスで教えていたときも同様の手法を利用していた経験を持つ。当時の指導教官から、「手話を使った授業にはコストがかかり、就職先が限られてしまう。テクノロジーを活用することを考えた方がいい」と助言されたことがきっかけだ。テキサスの

授業中の小テスト。Course N@viの小テスト機能を利用して授業の終わりに実施し、その日の理解度を確認する。



大学でもICT環境が整っていたため、それを利用すれば手話通訳といった人的サービスをお願いしなくても教えられると分かり、導入に踏み切った。

「アメリカでは、日本に比べてICTの活用が進んでいるという印象です。テキサスの大学でも半分以上の先生方はネットに資料をアップロードするなど積極的に利用していました」。そんな環境であったため、大学側が聴覚障がいを持つ教員のために特に何かを用意するというわけではなく、既存の仕組みを利用するだけで、ハンディを感じずに授業を行うことが可能になった。

「早稲田で教えることになったときは、私の授業でどんなシステムが使えるのか職員の方が前もって調べてくれました。おかげで、テキサスにいたときと同じように教えることができると分かり、安心して始められました」。

ただし、テキサスの大学では、教員と学生とが1対1でチャットをするモードも選択可能だったが、早稲田のシステムではそれができないのが、少し不満だという。「他の学生には見られたくない内容のやりとりは授業中にはできません。授業後にメールを使えばいいのですが、忘れてしまうこともあるし、その場で伝えた方が話も発展できるので、チャット上の会話が個別にもできるといいですね」。

将来的には動画でのコンテンツを作つておいてアップロードすることも検討している。「統計ソフトの使い方などを、今回は教室で画面を見せながらその場で説明していましたが、あらかじめ動画を作つておけば、もっと分かりやすく説明できると考えています」。Course N@viには、Waseda-net Commonsという動画作成からアップロードまでを簡単にできるツールも付属しているため、手軽に着手できそうだ。

学生の反応が分からないのは教員にとってもつまらない

この形態の授業を実施するためには、履修者各自がPCを使える教室を確保することが必要となる。また、今回は少人数だったため、学生からの質問をチャットで受け付けることができたが、大人数の授業では難しそうだ。「そもそも大教室での授業では、口頭であつても学生一人ひとりの質問をその場で受け付けることはしない

ケースが多いかもしれません。ただ、個人的には学生の反応が分からない授業はつまらないと感じるので、なんとか方法が見つかるといいと思います」。

こうした問題を解決するためのひとつのアイディアとして、早稲田大学にも導入されている「クリッカー」というツールがある。学生がスマートフォンを使って、選択式や自由記述で意思表示をし、瞬時に集計結果を教室内のスクリーンなどに表示できるというものだ。回答サイトには、あらかじめ各自のスマートフォンに大学公式アプリをインストールしておけば、簡単にアクセスできる。チャットの利用がむずかしいケースでは、こうしたツールの導入も検討の余地があるかもしれない。

「聞こえない教員でも教えることができる、こういう教員もいると示すことで、学生が何かを感じ取ってくれたらと思います」と中條助教は語る。今回の事例は、教員が聴覚障がい者という事情をカバーするために考えられた手法だが、ICTの活用がそうした状況に非常に有効であるということを実証したのみならず、積極的な質問を促す、履歴が全て残るといった点は、会話による意思疎通が可能な場合であつても参考にできるメリットと言えるのではないだろうか。